

青森県八戸市における市民の ポピュラー音楽演奏活動を支える社会基盤

山 田 晴 通

はじめに

筆者は、かつて、沖縄県におけるコミュニティ放送局の存立基盤について考察した論考（山田，2015）の中で、沖縄県の芸能者について、次のように述べた。

「沖縄県は伝統芸能から、洋楽系の音楽まで、多様な芸能者たちが日常的に様々な場面で活動しており、それが社会の中で可視化されている局面が多い。メディアのみならず、音楽を実演する酒場の類は多く、多数のいわば「生業的」な芸能者の存在があり、また、習い事として舞踊、芝居を含めた芸能に打ち込む人々の層は分厚いものとなっている。同時に、例えば沖縄民謡の市場は基本的には沖縄県内に限定されるために、ある程度知名度がある芸能者であっても、実は芸能のみによって生計を立てることは困難であることが多い。結果的に、芸能者の間における素人から玄人へのグラデーションは、無段階的なものとなり、両者が物理的な芸能空間を共有することも少なからず生じることになる。」（山田，2015，p.199）

沖縄県における音楽文化、ないし、音楽市場のこうした特殊性は、客観的な指標を提示して証明することは難しいが、概ね妥当な判断であるという考えに変わりはない。その上で、日本国内の他の地域について考えてみても、人口規模が大きい大都市圏においては、相当のボリュームをもって、芸能者の無段階的なグラデーションが成立することも、容易に想像される。

とりあえず、ポピュラー音楽に限った上で、そうしたグラデーションの最上位を占めるプロフェッショナルな音楽家たちが活動する空間を考えると、そこには、録音スタジオなど創作の現場に加え、コンサート会場や、メディアへの露出の機会があり、さらにプロモーション活動などに関連する多様な打ち合わせなどの情報交流の局面が含まれる。かつて、特にインターネット以前の段階では、こうした諸機能の大都市、特に東京への一極集中が当然視されていた（小野，1987）。このような大きな図式は、インターネットの普及が進んで、情報交流の回路が多様化するとともに、主要な音楽聴取の媒体が、CDなどのパッケージなり、モノとしてのレコード＝録音物から、デジタル配信、サブスクリプションへと大きく変

化してくる中でも、基本的には大きく揺らいでいない（渡部，2013）。これは、文化産業の立地において、歴史的慣性が大きく働いていることを示している。

もちろん、そうした中でも、様々な新しいテクノロジーを味方につける形で展開した、地方都市を拠点とする新たな音楽産業の形成に注目する議論も、2000年代以降には提起されており、2002年における MONGOL800 のアルバム『MESSAGE』（発売は2001年）の成功は、地方都市における音楽産業の可能性が注目される契機となった（増淵，2005，pp.3-4）。そうした議論は、沖縄県のほか、札幌市、仙台市、福岡市などについて展開されてきた（渡部，2013）。そこでは、どのような社会的背景なり、活動の基盤となる施設などが、音楽産業の形成に必要とされるかという観点からの検討も含まれている。例えば、増淵（2005，pp.7-9）は、福岡市を例に、ジャズ喫茶、ロック喫茶、ライブハウスといったライブ会場、録音や練習の場としてスタジオ、さらに楽器店や、放送局などを、「都市の文化的基盤のひとつ」としての「情報、知識の交換ができる「場」」と捉え、その福岡市内における分布を論じている。

もちろん他方では、例えばライブハウスをはじめとするライブ演奏の場において、アマチュアとして活動実績を積み重ねた上で、プロへの道が開かれる、という従来からのモデルが、必ずしも機能しないところで、各種の SNS など、ネット上でのプロモーションの作用によって「アマチュアでいながら、あるいはアマチュアからいきなりアーティストとして楽曲の販売に成功するというケースが増えてきている」という指摘も考慮しておかなければならない（渡部，2013，p.57）。そうした事例においては、極端な場合には、自宅スタジオでの宅録、あるいは、場合によっては、様々なソフトウェアを使い、PC の中にだけ存在する音楽が、ネット上で無数の聴き手に拡散されることさえ起こり得る。そのような場合には、上記の増淵（2005）が注目した「場」も、地理的に存在するものではなく、人々を結びつける結節点としてネット上のみ存在することになるかもしれない。たとえば、もっぱらネットを介したファイルの共有を核として展開していく、ボーカロイドの音楽なり、それも含めた同人音楽の世界を考えてみれば容易に理解されよう。しかし、本稿では、この方向での議論には立ち入らない。

さて、上述の議論は、いずれも地方都市における音楽「産業」の可能性に注目するものであった。本稿で検討するのは、そのような「産業」と呼べる水準には至らないところで、アマチュアとしての地域の音楽家たちが、市民による文化活動という文脈の中でポピュラー音楽を中心とした演奏活動を展開する、という状況である。「産業」未満の水準ではあっても、中核市程度の規模の地方都市では、様々な形で音楽活動が展開されていることがよくあるし、中には行政が「まちづくり」などの文脈で音楽文化を、通常の文教行政などの水準を超えて、踏み込んだ形で政策的に振興している例も見受けられる。地方都市における音楽産業の成立に、地域内の様々な施設が「場」として機能することが必要になるように、産業の成立に至らない水準であっても、市民による文化活動としての音楽演奏の持続的な展開のためには、

それを支える様々な「場」の存在が必要になるはずであるし、そこに行政や、商工会議所、青年会議所など半ば公的性格を帯びた地域的組織が、何らかの形でアクターとして関わってくることもある。地方都市における音楽産業の可能性を検討した諸論考は、文化としての音楽活動の存立基盤を検討する上でも、有意義な示唆を与えるものとなろう。

さて、以下、本稿で検討対象とする青森県八戸市は、総人口 21 万人あまり、周辺地域を含めた圏域人口でも 32 万人、商圏人口で 63 万人とされる程度であり、中核市として指定されてはいるものの、札幌市や福岡市はもちろん、仙台市も含め、政令指定都市と比肩できる規模の大都市ではない。しかし、八戸市は、客観的な指標などを提示することは難しいが、同規模の他の地方都市と比較して、アマチュア音楽家たちの活動が分厚い印象を与える都市である¹⁾。特に、ポピュラー音楽に関しては、ジャズからアイドル・ポップに至る多様なジャンルの演奏活動が、頻繁に展開されている。

筆者が、八戸市におけるアマチュア音楽家たちの活動に注目するようになった契機は、2000 年以來、形を変えながら継続的に取り組まれてきた、一連の「フォークジャンボリー」の名を冠した活動であった。山田 (2025a) では、2000 年に最初のごく小規模なイベントがおこなわれ、その後、組織化が進み、最終的に八戸市が主催する市民音楽祭として位置づけられるまでに至った「馬淵川フォークジャンボリー」～「HACHINOHE フォークジャンボリー」の経緯について、事実関係を整理する作業をおこなった。以下、本稿では、山田 (2025a) との重複は避け、一連の「フォークジャンボリー」の経緯については詳説せず、必要に応じて山田 (2025a) の関連ページを提示するだけにとどめる。また、本稿では、「フォークジャンボリー」活動のみならず、広く一般的に八戸市における、アマチュア音楽家たちの活動の社会的基盤として、どのような施設や空間が、増淵 (2005) のいう「場」として機能するのか、という観点から整理をおこなうことに主眼を置く。その上で、最後には、地元関係者へのインタビューの中で聞かれた言説を手がかりとして、八戸市におけるアマチュア音楽家たちの活発な活動を支える存立基盤、社会的背景の地域性について、暫定的にひとつの解釈を提示したい。

I. 多様なライブ演奏の会場

1. 大規模施設

八戸市にはトッププロのポピュラー音楽家が来演してコンサートをおこなえる施設が複数ある。八戸市におけるライブ会場の包括的な情報として、ネット上には「ライブ部」によるリストがあり、2025 年 7 月の時点では、収容人数順に 32 件の施設の名称が紹介されていた²⁾。それによると、1,000 人以上の規模の施設は 6 件 (実質 5 施設)、100 人以上 1,000 人未満の施設は 9 件とされていた。[表 1]

表1 「ライブ部」による八戸市の主要ライブ会場
(収容人数 100 人以上：収容人数順：2025 年 7 月現在)

名称	収容人数	備考
YS アリーナ八戸	9,000 人	○
フラット八戸・フラットアリーナ	5,000 人	
カッコーの森エコーランド・エコーステージ	3,000 人	
SG GROUP ホールはちのへ・大ホール	1,542 席	○, 2 階席使用時
八戸プラザホテル・プラザアーバンホール ★	1,500 人	
SG GROUP ホールはちのへ・中ホール	1,002 席	○, 1 階席のみ使用
SG GROUP ホールはちのへ・小ホール	492 席	○
八戸市南郷文化ホール (スウィングベリー NANGO)	450 席	
八戸ポータルミュージアムはっち・はっちひろば	160 席	○
青森 FOR ME ★	160 人	○
八食センター・厨ホール ★	150 人	
八戸ポータルミュージアムはっち・シアター 1	120 席	○
八戸ポータルミュージアムはっち・シアター 2	120 席	○
デーリー東北新聞社・デーリー東北ホール ★	120 席	
ジャズの館南郷	100 席	

★：純民間施設, ○：中心市街地内, ないし, 隣接

このうち、最も大規模な「YS アリーナ八戸」と「フラット八戸」は、それぞれ中心市街地の西のはずれと、中心市街地から離れた JR 八戸駅の北西に位置しているが、もっぱらアイスアリーナ、スポーツ競技施設として運用されており、コンサート会場として使用される機会は少ない³⁾。3 番目に挙げられている「カッコーの森エコーランド・エコーステージ」は、2005 年に八戸市に合併された旧・南郷村に位置する屋外施設である。八戸市の中心市街地から、南へ 20 km あまり、車で 30 分以上離れた位置にあるカッコーの森エコーランドは、隣接する「道の駅なんごう」などと一体化した、南郷地区の中心部の一角を成す施設であり、例年 7 月に開催される「南郷サマージャズフェスティバル」の会場として知られているが、それ以外の機会にコンサート会場として使用されることはほとんどない⁴⁾。

一般的に、八戸市を代表するコンサート会場として認識されているのは、中心市街地の北部、市役所の北側に隣接する位置にある、旧「八戸市公会堂・八戸市公民館」、すなわち「SG GROUP ホールはちのへ」である⁵⁾。2024 年 10 月から、ネーミングライツ制度の導入によって現行の名称とされて以降の大ホールでの公演に限ってみても、クラシック系ではオーケストラアンサンブル金沢⁶⁾、清塚信也、宮田大／ジュリアン・ジェルネ、牛牛（ニューニュ



写真 1

「八食サマーフリーライブ」の
仮設ステージ

2025 年 8 月 23 日撮影
(筆者撮影)

ウ), 山形交響楽団, ポピュラー音楽系では南こうせつ, My Hair is Bad, 福田こうへい, sumika, 吉幾三, 松平健などの公演があり, さらに林家たい平/桂宮治の落語会などもおこなわれている。

この他, 常設の会場ではないためか「ライブ部」のデータからは漏れているが, 八戸の音楽イベントとして重要な「八食サマーフリーライブ」の会場となる, 八食センターについても言及しておくべきであろう。2001 年から始まったとされる「八食サマーフリーライブ」は, 八戸市郊外に広大な駐車場を構える商業施設である八食センターの駐車場に設けられる特設ステージで, 近年では 8 月下旬の 2 日間にわたっておこなわれているライブ・イベントである⁷⁾。イベントの動員数は, 正確には把握されていないようであるが, 例年, 2 日間でのべ 2 万人以上とも言われており, 公演中の会場には数千人が詰め掛ける状態になる。このイベントは, 地元のバンドが出演することも皆無ではないが, おもな出演者は, インディーズ系で CD 等のリリース実績があり, 全国各地のライブハウスで活動しているようなグループである。[写真 1]

以上に挙げた大規模会場のメインステージは, 基本的にはアマチュア音楽家たちが立つ場所ではない。その例外としては, まず, 「南郷サマージャズフェスティバル」で, 例年, オープニングを務めている, 市民楽団「スウィングベリージャズオーケストラ」や, 八戸市立中沢中学校ジャズバンド部など, 地元の市民たちによるバンドが挙げられる⁸⁾。また, 「SG GROUP ホールはちのへ」の大ホールは, 2 階席を使わないと中ホールという扱いになるが, 中ホールでは「HACHINOHE ナリキリ音楽祭」や, 八戸市公会堂と呼ばれていた頃の「HACHINOHE フォークジャンボリー」といった, 市民音楽祭と位置付けられた行事があり, アマチュア音楽家たちもステージに上がる機会が用意されている (山田, 2025a, pp.8-9)。実際に出演者としてステージに立ったアマチュア音楽家たちの中には, 「プロの演者たちと



写真 2

「ナリキリ音楽祭」

E. NOMURA 830 バンド

八戸市公会堂 中ホール

2023 年 9 月 23 日撮影

(筆者撮影)

同じ場に立ち、同じ視線で観客席を眺めるといふ経験に、感動を覚えた者も少なくなかった」(山田, 2025a, pp.4-5)。**[写真 2]**

なお、大規模施設では、様々な行事がおこなわれる際に、会場の一角（屋外のこともあれば、屋内のこともある）にステージを設けて、何らかの演奏が披露される場合もある。こうした例は、次節で言及する、中・小規模の屋外の仮設ステージに準じるものとして理解すべきであろう。

2. 中・小規模施設

前節で言及した大規模施設とは対照的に、収容人員が 500 人弱の会場になると、アマチュアの音楽活動の比率がずっと大きくなる。例えば、八戸市に合併された旧・南郷村の施設であった南郷文化ホール（450 席）は、南郷地区を拠点とするスウィングベリージャズオーケストラ（SJO）が定期的に公演する場所であると同時に、日常的な練習場所ともなっている。また、ヤマハ音楽教室の運営にあたっている楽器店のグルーヴィン楽器は、音楽教室の発表会を、「SG GROUP ホールはちのへ」小ホール（八戸市公民館ホール：492 席）で定期的に開催している。**[写真 3]**

さらに、収容人員が 100 人前後から下の小規模な会場については、網羅的に把握することが難しく、また、仮に一応の把握ができたとしても、実態を知るにはあまり意味がないおそれもある。たとえば、公表されているデータでは、着席 30 席とされている空間に、スタンディングで 100 人以上が集まるといったことも、容易に起こり得るからである。

こうした小規模な会場には、公的性格を帯びた施設と、典型的なライブハウスなどの純民間の施設が混在している。前者の代表的事例としては、2011 年 2 月 11 日に開業した「八戸ポータルミュージアムはっち」が挙げられる。この施設は、委託管理ではなく、市が直接運



写真 3

グルーヴィン楽器 発表会
八戸市公民館ホール（小ホール）
2024 年 11 月 10 日撮影
（筆者撮影）

営しており、様々な公的性格のまちづくり関係行事の拠点となっている。1 階には、160 席相当とされる開放された空間「はっちひろば」と、120 席の閉じられた空間としての「シアター 1」、2 階には同じく 120 席の「シアター 2」が設けられている。さらに「はっち」から道を挟んだ向かい側（南東側）にある「マチニワ」も、開放的な空間として様々な利用がなされている。また、南郷地区の施設で、100 席とされる「ジャズの館南郷」も、こちらにあたる。[写真 4・5]

一方、民間の施設としては、地元の新聞社がかつての印刷工場跡の空間を利用して設けている 120 席の「デリー東北ホール」のほか、ライブハウスとして営業している 1989 年創業の「ROXX」、2002 年創業の「パワーステーション A7」、2017 年創業の「FOR ME」などが代表的なところである⁹⁾。[写真 6・7]

このほかにも、市街地内の広場や、歩行者天国など、公共的空間における、開放的で、しばしば仮設のステージにおけるライブは、各種の屋外イベントで多数機会が提供されており、アマチュアの演奏機会も多い。また、ショッピングセンターや、簡単なステージが用意されたレストラン、ホテルのショーなどの機会も含め、地元のミュージシャンたちの活動の場は、八戸市中心街を核にしつつ、周辺自治体まで広がっている。

ひとつの例として、八戸市を拠点とする音楽ユニット「Yukiko & Ponta」や、それを核に編成されているバンド「ボサノバ倶楽部」、「カーボンターズ」でボーカルを務めている Yukiko こと、鈴木友紀子のスケジュールから、主要なものを抜粋して見ていくと、おもだった演奏の場の多様性と地理的な広がりが理解される¹⁰⁾。ここで Yukiko が歌っている場所のうち、ライブハウスのみならず、ショッピングセンター、レストラン、さらには、表の範囲では該当しないがホテルのディナー・ショーなどは、来演するプロと地元のアマチュアが共有する場となっている¹¹⁾。[表 2]

青森県八戸市における市民のポピュラー音楽演奏活動を支える社会基盤



写真 4
はちのへホコテン
マチニワ
2024 年 9 月 29 日撮影
(筆者撮影)



写真 5
ほろ酔いまつり in 南郷 2025
Yukiko & Ponta
JAZZ の館 南郷
2025 年 2 月 8 日撮影
(筆者撮影)



写真 6
ROXX 入口
2024 年 9 月 5 日撮影
(筆者撮影)



写真 7
FOR ME 入口
(店舗は地下 2 階)
2025 年 6 月 23 日撮影
(筆者撮影)

3. きわめて小規模な施設

さらに、喫茶店や居酒屋などの飲食店で、収容人員が 50 名にも満たない水準のきわめて小規模な会場における演奏の機会も多い。こうした場所で演奏するのはアマチュアのミュージシャンたちが主体だが、(ロック以外の) ライブハウス系のプロが出演する場合もある。こうしたきわめて小規模な会場は、開設当初からライブ会場とすることを想定している場合も一部にはあるが、多くは、演奏する機会を求めるアマチュアのミュージシャンたち、あるいは、彼らの中でも特に熱心に演奏できる場所を開拓してきたエンスージアストたちによって、後付けでライブ会場としての体裁が整えられてきたところが多い。また、こうしたきわめて小規模な会場となる飲食店などの経営者の中には、自身の店舗をライブ会場として提供するだけでなく、様々な公的イベントに出店者として参加したり、他の会場を使用する場合なども含めて、自ら主催するイベントを展開し、その中にライブの機会を組み込むといった取り組みを積極的におこなっている者もある。

その代表的な事例としては、山田 (2025a, p. 9, p. 17 注 31) で言及した、須藤憲男 (b.1955) が経営するヤグラ横丁の喫茶店「ピーマン」の取り組みとしての、館鼻岸壁朝市における「朝市ライブ」や、はちのへホコテン (5 月から 10 月にかけて、月 1 回、八戸市中心街の大通りを歩行者天国にして実施されるイベント) における「ヤグラ横丁ライブ」などが挙げられる。[写真 8・9]

ここでは、副島雅子が経営する大工町の「きっ茶・るぼぞん」を例に、多様な取り組みを概観しておく。2010 年に開店した「るぼぞん」は、カウンター 5 席ほどで、フロアにテーブルが 2 つほど入るかどうかわからない、ライブの際に詰め込んでもせいぜい十数名と思われる狭隘な空間であるが、ほぼ毎月の定例のイベントとして、八戸市在住のジャズ・ピアニストであるデイヴィッド・マシューズ (b.1942)¹²⁾ のライブを開催し、またほぼ毎月「白州会」と称す

青森県八戸市における市民のポピュラー音楽演奏活動を支える社会基盤

表2 Yukiko のおもなライブ活動（2025年1月～11月）

日程	イベント名称	会場	所在地	出演名義*
2月8日	ほろ酔い祭り	ジャズの館南郷	八戸市南郷	Y & P, BC
4月13日	はちのへ着物フェス	マチニワ	八戸市中心街	Y & P
4月27日	SolaCafe マリエント LIVE	水産科学館マリエント	八戸市鮫町	Y & P, BC
4月27日	A7 昭和歌謡企画	パワーステーション A7	八戸市中心街	Y & P
4月29日	第1回軽米赤レンガ倉庫音楽会	BUSTA 赤レンガ倉庫	軽米町	Y & P
5月3日	はちのへ公園春まつり	八戸公園 芝生広場	八戸市十日市	Y & P
5月4日	SANNOHE SOUNDS SHOWER	三戸城山公園	三戸町	Y & P
5月22日	美食会	レストラン樹林	八戸市中心街	マークフレンズトリオ
5月25日	ヤグラ横丁ストリートライブ	レイニーデイ（雨天のため）	八戸市中心街	Y & P
5月31日	第14回タブコブマルシェ	タブコブ創造村	田子町	Y & P, BC
6月7日	ケンクミガーデンライブ	ケンクミガーデン	八戸市湊高台	Y & P
6月22日	田子にんにく収穫祭	田子町農山村広場	田子町	Y & P
6月22日	ヤグラ横丁ストリートライブ	はちのへホコテン	八戸市中心街	Y & P
7月5日	「STORY を添えて」VOL.2	North40-40 八戸店	八戸市中心街	Yukiko
7月12日	おいらせ森の感謝祭	下田公園	おいらせ町	Y & P
7月18日	はちのへ七夕まつり／ヤグラ横 丁ストリートライブ	はちのへホコテン	八戸市中心街	BC
7月27日	イオンの森ライブ	イオンモール下田	おいらせ町	Y&P
7月27日	南部町民感謝祭	南部町役場前町民広場	南部町	STORY
8月31日	夏の終わりの、懐かし洋楽	AEM	八戸市中心街	カーボンターズ
9月21日	ナリキリ音楽祭	SG GROUP ホールはちのへ	八戸市中心街	カーボンターズ
10月25日	白銀地区親睦演芸大会	八戸市立白銀小学校	八戸市白銀	Yukiko
10月25日	宵の灯 market	ジェイウッド八戸店	八戸市田向	Y&P
11月2日	SolaCafe マリエント LIVE	水産科学館マリエント	八戸市鮫町	Y & P, BC
11月9日	コピーバンドスペシャル	AEM	八戸市中心街	カーボンターズ

Facebook (https://www.facebook.com/profile.php?id=100088952945303&locale=ja_JP) で出演への言及がなされているものだけを列挙した。

*出演名義の「Y&P」は「Yukiko & Ponta」, 「BC」は「ボサノバ倶楽部」

るジャズのジャム・セッションもおこない、その上で、各種の音楽ライブが、毎月1～4回開催されている。さらに、「こっそり」と題された女性だけの集いや、「アコナイ」と称する参加者全員が何らかの演奏を披露する会もほぼ毎月開催されており、加えて、音楽とは無関係な、トークイベントなど各種行事も定期的に行われている。また、店舗の外でも、ホコテンなど、各種の公的な行事に出店という形で参加したり、他の場所を借りてカラオケやディスコイベントを開催したりといったこともおこなっている¹³⁾。「るぼぞん」の場合、ライブをおこなうミュージシャンは、地元八戸のアマチュアであることが多い。また、極めて小規模な会場ということもあり、PAを通して大音量が鳴るようなロック系の音楽は扱われな



写真 8
館鼻岸壁朝市
ピーマン朝市ライブ
大吉
2025 年 8 月 24 日撮影
(筆者撮影)



写真 9
ヤグラ横丁ライブ
Rainy Day
2024 年 9 月 29 日撮影
(筆者撮影)

いが、カラオケを楽しむような簡易なパフォーマンスから、本格的なジャズ・コンボの演奏まで、多様な音楽が聴かれる場所になっている。[写真 10]

ちなみに、岩泉町の飲食店（スナックとでも呼ぶべき業態）「Rainy Day」は、比較的広いフロアの空間があり、「ディスコナイト」などと称するイベントも開催されるような場所である。もともとライブを頻繁に開催することを想定した店ではなかったというが、常連客が機材などを揃え、さらに店名と同じ名義のバンドを組んで活動するなどして、その他のライブの機会も増えて現在に至っている。るぼぞんの副島雅子は、Rainy Day を会場としたディスコ・イベントなども企画・運営している。[写真 11]

もうひとつの事例として、六日町のテナントビル「いわとくパルコ」の4階で、2019 年 4 月 30 日から 2025 年 3 月 31 日まで、佐々木亜裕美が経営していたカフェ「パトリー—Patrie—」



写真 10

きっ茶・るぼぞん
2025 年 8 月 22 日撮影
(筆者撮影)



写真 11

Rainy Day (岩泉町)
Rainy Day (常連客のバンド)
2025 年 8 月 24 日撮影
(筆者撮影)

についても言及しておく。佐々木は地元出身で、仙台の製菓専門学校に学び、東京での飲食店勤務を経験した後、20代の最後に帰郷し、ROXX や FOR ME、レゲエバー「ONE DROP (ワン・ドロップ)」などを会場に、「パーティー」と称されるロック系の DJ イベントを、「Patrie」名義で主催するようになった。その後、当時、いわとくパルコのオーナーであった岩岡徳衛の協力を得て、空室となっていた本館4階の会議室を改装し、カフェ「パトリー Patrie」を開店した。パトリーは、通常のカフェ営業では、カウンターとテーブルを合わせて20席にもならない規模の空間であったが、店の奥、窓際の位置に、DJ 機材が用意されており、定期的に DJ イベントが開催され、スタンディングでは50名以上が入ることもあったという。また、店内のみならず、屋上も含め、空きスペースが多かったいわとくパルコの他の場所も利用して様々なイベントも企画した。さらに佐々木は、パトリー以外でも、八食セン

ター厨ホールでのロック・ライブの企画なども手がけた。2025 年 3 月のいわとくパルコの閉館を前に、2 月 2 日には「いわとくパルコフェス」が開催されたが、これも佐々木が企画を主導したものであった。パトリでは、ライブ演奏の比重は大きくなく、頻繁に取り組まれていたのは DJ イベントであったが、パトリは、佐々木と同世代の 30 代前後の若いミュージシャンたちを中心に、地元の音楽愛好者が広く集まる「場」のひとつとなっていた¹⁴⁾。

II. その他の施設

1. スタジオに準じる施設

音楽を披露する公演の場と並んで、日常的な練習や、録音などをおこなうためのスタジオ施設も、音楽活動を支える重要な「場」である。アマチュアであっても「デモ音源」の制作は重要である。例えば、公的なイベントへの参加を希望する場合には事前に審査を受けるために「デモ音源」が必要になるのが普通である。もともと大都会に比べて住宅事情に恵まれている地方都市では、近年の機材品質の向上もあり、自宅スタジオで事足りる場合も増えつつあるが、多くのアマチュアたちは、公民館の音楽室など公的性格の施設や、郊外型のカラオケボックス、平日の閑散時間帯のライブハウスなどをスタジオとして利用している¹⁵⁾。

八戸市の場合、特徴となっている取り組みのひとつとして、「はっちパフォーマーバンク」と称される、練習場や発表の機会に関する情報を、行政が積極的に提供していく仕組みがある。これはもともと、はっち 1 階のオープンスペースである「はっちひろば」でおこなう「ストリートライブ in はっち」への出演者を組織化していく取り組みであるが、それ以外の出演機会や、練習スタジオなどの情報提供をおこなう仕組みとなっている¹⁶⁾。こうした、公的施設による支援は、市民のアマチュアとしての音楽活動が盛んになる上で、追い風になっている。八戸市の場合、この取り組みが、まちづくり政策の中に位置づいていることにも注意をすべきであろう¹⁷⁾。

2. レコード店、楽器店など

八戸市では、長らく丸光百貨店八戸店（1968 年開店：現在の、さくら野百貨店八戸店）の 1 階と 2 階に入っていた「文明堂」が、レコード店（1 階）、楽器店（2 階）として代表的な存在であったが、2000 年代はじめに閉店した。ほかにも六日町のカワムラレコード、ヤグラ横丁のナカノレコード、また中古レコード店のオキノが中心市街地にあった¹⁸⁾。なお、ここでは、CD 等も含め、記録物＝レコードを扱う小売店という意味で「レコード店」という表現を用いる。

日本における CD の売り上げは、1998 年をピークとして徐々に下落し、物理的な音楽メディアの衰退によって、本格的なレコード店のみならず、レンタル・レコード店や、中古レ

コード店なども、徐々に姿を消していった。八戸においても同様の傾向が進んでいったが、そうした中で、本格的なレコード店として最後まで気を吐いていたのが、中心市街地の北東のはずれにあたる柏崎に最後の店舗を構えていた「CD & DVD SHOP FOR YOU」であった。1986年に開業した「FOR YOU」は、一時期は市内に複数店舗を展開していたが、最終的に2025年4月20日に閉店した。「FOR YOU」を運営していた有限会社マツモトは、2017年にライブハウス「FOR ME」を開業しており、それ以前から八食サマーフリーライブに深く関わるなど、単なるレコード小売業の枠を超えて、音楽に関係する事業に取り組んでいる¹⁹⁾。

楽器店として代表的存在となっているのは、中心市街地の北側に位置する内丸の「グルーヴィン楽器」である²⁰⁾。文明堂の店員から独立した戸川康雄（b.1950）が1981年に創業したグルーヴィン楽器は、ヤマハ音楽教室を運営し、青少年のみならず、大人も含め、ポピュラー音楽を中心に多くの生徒を集めている。教室の講師として地元のミュージシャンたちが起用されることで、彼らが交流する「場」のひとつとなってもいる。山田（2025a, p.3）で言及した古川明彦（b.1955）の例のように、エレキギター科の講師を長く務めることを通して、世代を超えて広く人的なネットワークを広げていった者も多い。楽器店としてのグルーヴィン楽器の取り組みは、音楽教室を運営にとどまらず、小学校から高等学校までの各段階の学校吹奏楽部への支援や、その他の教育・文化的事業への関与など、多岐にわたっている。

中心市街地の南側に位置する鳥屋部町の「サウンドスピリッツ」は、単なる楽器の販売ではなく、ギターと電子楽器を中心に、楽器の修理や中古楽器の売買などに注力し、グルーヴィン楽器とは異なるビジネス・モデルを築いている²¹⁾。

3. ケーブルテレビとコミュニティ放送

「はじめに」で述べたように、地方都市における音楽「産業」の可能性について検討していた先行研究では、「情報、知識の交換ができる「場」」のひとつとして放送局にも注目していた。一般的に、アマチュア・ミュージシャンたちの、カバー曲のパフォーマンスが、県域放送以上のテレビ、ラジオに大きく取り上げられることはない。他方で、地域に特化した放送媒体である、ケーブルテレビの自主放送チャンネルや、コミュニティ放送局のFMラジオであれば、状況によっては地元のアマチュア・ミュージシャンたちが少なからず関わるような放送番組制作がおこなわれることもあり得る²²⁾。しかし、そのような状況は、どこでも見出せるものではない。地域メディアと地元ミュージシャンの関係性に見出される地域的多様性は、それ自体が興味深い主題ではあるが、ここでは一般化された議論には立ち入らず、八戸市における現状を確認しておく。

八戸市には、自主放送チャンネルを運営しているケーブルテレビ局である「八戸テレビ放送」（1982年に「南部ケーブルネットワーク」として開局、1986年に現社名に変更）があり、



写真 12

BeFM が 1 階と 2 階に入っている番町 ND ビル
2024 年 8 月 6 日撮影
(筆者撮影)

また、コミュニティ放送局である「BeFM」(1999 年開局)がある。しかし、これらの局において、地元のアマチュア・ミュージシャンたちが露出する機会は必ずしも多いとは言えないように見える。[写真 12]

山田 (2025a, p.4) で言及したように、八戸テレビ放送は 2004 年に、がくや姫の活動を取り上げた番組を制作したことがあったが、これは地域の問題を取り上げたドキュメンタリー的な内容であり、音楽番組ではなかった²³⁾。また、八戸テレビ放送と BeFM は、2015 年以降の「ミュージックレビュー八戸」に、県域民放各局 (ラジオ・テレビ)、新聞社とともに「後援」に名を連ねたが、これは事前の告知などに協力するという程度の関わりであり、必ずしも実質的なものではなかったが、BeFM は録音放送を後日流すと言う形で、一歩踏み込んだ関わり方をしていた (山田, 2025a, p.8)。2025 年の「ナリキリ音楽祭」は、BeFM に加えて、八戸テレビ放送も録画・編集した内容を後日、番組として放送した²⁴⁾。しかし、これらはまだ例外的な取り組みと言えるだろう。現状では、これらの地域的な放送局は、地元のミュージシャンたちの活動を十分に取り込んでいない、あるいは、ミュージシャンたちが交流する「場」としては機能していない。

それでは、これら放送局が、地元のミュージシャンたちと没交渉なのかといえ、そんなことはない。少なくとも BeFM については、実は、社員スタッフの中に、自らもミュージシャンとして活動している者や、コミュニティ放送に関わる前に、他の音楽関係の職種で職務経験を積んだ者が複数含まれており、スタッフの人脈はアマチュア・ミュージシャンたちと不即不離に繋がっている²⁵⁾。

III. 地元ミュージシャンたちの言説にみる、活動を支える文化的背景

八戸においてアマチュア音楽家たちの活動が活発で、質的にも量的にも充実したものになっていることは、当事者である地元ミュージシャンたちの間にも、広く自認されている。なぜ、そのようなことが起きているのか、と問いかけると、一定の説得力をもった様々な言説が紡がれていくことになる。

最も頻繁に、しばしば聴かれる言説は、八戸が、歴史的に見ても、人口規模に比して飲食店が多い都市であり、それに伴って音楽が求められる場所も昔から数多くあった、という趣旨の語りである。実際、様々な観点から見て、八戸市はその人口規模に対して飲食店が多い都市である²⁶⁾。山田（2025a, p. 3, p. 14 注 5）では、パワーステーション A7 のマスターである古川明彦の言葉を起点に、関連する情報源も踏まえて、1980 年代の八戸におけるディスコの隆盛ぶりについて言及したが、ディスコ以前にも八戸には踊ることもできたキャバレーやダンスホールの類が複数存在していたとされ、そうした場では生演奏が必要とされることも多かったという。

その背景についての説明として、ひとつには、漁船員の豪遊の受け皿としての歓楽街の発達という言説が聞かれた。八戸は、工業港としての性格が強い港湾都市であるが、魚港としても全国で 13 ヶ所しかない特定第三種漁港のひとつに指定されており、遠洋漁業の基地としての性格ももっている²⁷⁾。洋上生活が長い遠洋漁業の漁船員は、航海を終えて上陸すると、現金で多額の報酬を受け取って、港町の歓楽街で豪遊する、というストーリーは、しばしば都市伝説的にも語られるところである。

また、歴史を遡ると、1970 年代以前の高度経済成長期においては、三沢市の米軍基地の兵員の来街という点も、八戸の夜の街の重要な特徴のひとつとなっていたという。高度経済成長期において、沖縄県や神奈川県をはじめ、米軍基地を抱えた地域では、米兵は、多くの商店や飲食店にとって金離れの良い上客であり、彼らが来街することはその街の強い個性のひとつとなっていた。日本の文脈ではジャズ文化、特にモダン・ジャズの地域への定着は、しばしば米兵との関係で語られるが²⁸⁾、その意味では、三沢基地が近傍にあり、少なくともかつて 1970 年代までは、米兵たちが八戸で遊ぶ機会が少なからずあったという言説は、特にジャズ系の音楽の定着過程を理解していく上で、重要なものであったろう。

また、複数の、青森県内での転居を経験した者からは、八戸市は（青森県内の他地域に比べ）小・中学校における吹奏楽のレベルがおしなべて高い、といった意味合いの言説が聞かれた。これは「鶏と卵」のような関係の話でもあろうが、初等教育における水準の高い吹奏楽教育がなされていることが、一般市民の間の（多様な意味における）音楽リテラシーの向上につながっており、それが、青年期以降の趣味として何らかのジャンルの音楽の演奏に取

り組む層を質・量ともに充実させているという認識も、広く共有されているようである²⁹⁾。ただし、八戸市における吹奏楽のレベルが「高い」ことを、コンクールの入賞実績などの客観的指標で示すことは難しい。肝心なのは、このような言説が、八戸市の関係者の中で、一種の自負として共有されている、という点である。

さらに、青森県において伝統的に認識されている「津軽と南部」の対比という文脈に乗る形で、「南部人」である八戸の人々は、「津軽人」とは異なり、自らの個性を強く主張することは少なく、他者を受け入れることに抵抗がない、といった自己規定をしたうえで³⁰⁾、それが、カバー、コピー、トリビュート、「ナリキリ」、といった、「模倣」を前提とした表現を好む素地となっている、とする言説も聞かれた。

おわりに

「はじめに」で述べたように、筆者が、八戸市に注目した契機は、一連の「フォークジャンボリー」活動であった。山田(2025a)では、2000年のごく小規模なイベントを起点として、組織化され、八戸市主催の市民音楽祭という公的承認に至った「フォークジャンボリー」の経緯を追ったが、そこで、強く印象に残ったのは、「ナリキリ」に関わるアマチュア音楽家たちによるパフォーマンスの水準の高さと、オリジナルを指向せず、「ナリキリ」に徹する姿勢であった。

演奏のみならず、様々な舞台上の演出なども含めた意味でのパフォーマンスの水準の高さについては、主観的な思い込みに過ぎないのではないかという見解もあるかと思う³¹⁾。また「ナリキリ」についても、同様のパフォーマンスに入れ込んでいる人々は他の多くの地域にも存在する、という指摘もあり得よう。しかし、ここでは、八戸で観察される状況がユニークであるか否か、他地域より抜きん出た事例なのか否か、といった議論は一旦保留し、現に八戸で展開されているアマチュア音楽家たちによるポピュラー音楽の実践が、どのような社会的基盤の上にあるのかを見極めることを試みた。

八戸市の場合は、物理的な施設という意味でも、また、機会の設定、提供という意味でも、市民のポピュラー音楽を通した表現活動に対する、市当局の支援が、「まちづくり」という文脈の中で、かなり手厚くなっているように思われる。また、行政のコミットメント以外にも、八戸市における、アマチュア音楽家たちの活動を支える社会的基盤として、どのような施設や空間が、「情報、知識の交換ができる「場」」(増淵, 2005, p.7),あるいは、「刺激や情報を交換する「場」」(増淵, 2005, p.8)として機能するのかを考えるためには、地方都市における音楽「産業」の可能性をめぐる先行研究における議論をなぞりながら、想定される社会的基盤として多様な施設の運用実態を見ておくべきであったろう。

規模別に見たライブ会場が、機能や運用方法の違いを抱えていること、むしろ小規模の施

設の方が人々を結びつける結節点となる可能性を秘めていることなど、また、音楽関連の諸施設が、成立したり、失われたりを繰り返す中で、「場」として機能するか否かは、ケースごとに置かれた環境、条件の違いによって大きく異なってくることが示唆された。音楽を聴く側も、奏でる側も含め、八戸における、ポピュラー音楽を愛好する文化を支え、その再生産を促しているのは、末端のきわめて小規模な多数の施設において、演奏機会が数多く提供されているという状況である。ごく稚拙な、初心者であっても、自分を受け入れてもらえる場所を見出すことは可能であるし、もし本格的に何か楽器を学ぼうと思えば、充実した音楽教室が中心市街地に存在している。

客観的な観点からミュージシャンたちが諸施設に、どう関わっているのか、という観察とは別に、当事者である地元のアマチュア音楽家たちへのインタビューからは、八戸におけるアマチュア音楽活動の活発さを説明する、複数の主観的な見解が聞かれた。漁港を抱える港町として、歓楽街文化と結びついた飲食店などの量的集積があること、かつて米軍三沢基地の存在によって米兵たちが市街地をよく訪れていたこと、小中学校における吹奏楽教育の普及の影響などが、代表的な見解であった。さらに、青森県内における津軽地方と南部地方の気質の違いを踏まえ、八戸の音楽的实践が「模倣」や「ナリキリ」といった文化的志向を重んじる傾向と関係しているのではないかという声も聞かれた。

これらを踏まえ、暫定的にひとつの解釈の見通しを提示しておきたい。八戸の人々の間には、自分たちの生活世界が、「中央」から隔絶された地域であるという意識とともに、港湾都市としての文化的性格もあって外部から到来するものを受け入れる気質が歴史的に形成されてきた。そのため、「中央」から発信され、メディアを介して流入してくる文化を受け入れながら、その「本物」の担い手の生のパフォーマンスに触れる機会が乏しい、という、大きな矛盾を抱えた状況が常態化することになった。そのような状況の中で、隔絶された、閉じた世界としての地域社会の中で、メディア文化としての「本物」をお手本として、それに対する「ナリキリ」を実践し、その完成度を高めていくという、ある意味では禁欲的、求道的な姿勢が成立したのではないだろうか。

八戸における「ナリキリ」文化が、特異に見える背景には、1960年代以来の洋楽におけるビートルズや、シンガーソングライターたちの台頭を受けて以降の、おもに1970年代以降の日本のニューミュージック、J-POPと称された分野における、自作自演、オリジナル楽曲を至高とみなす価値観がある。そもそもレコードやラジオといった大量複製技術が成立する以前のルーツ・ミュージックにおいては、楽曲と特定の演者との結び付きは決して強いものではなく、流行歌は、口伝てに多数の歌い手に歌われることで流行していった。特定の楽曲が、特定の演者と強く結び付き、楽曲を占有するようになっていくような状況、すなわち、「この歌はあの歌手が歌わなければ本物ではない」という思いが広がっていったのは、大量複製技術のひとつの帰結であったといえるだろう。本家が歌った歌声が、再現性の高いメデ

ィアの中にあるのだから、他の歌い手の歌声で聴く必要はない、という聴く側の認識は、メディア文化の消費という局面において成立するものである。

しかし、メディアを介して伝えられるものは、所詮は直接の体験としてのライブには敵わない、というもうひとつ別の価値観の軸も存在する。記録物＝レコードとしてのメディアでは満足できない、生々しい快感が本物のライブにはある。だからこそ、レコードを散々聴いたアーティストのライブに、人々は足を運ぶのである。

一方で、音楽の楽しみは、楽曲を聴くことばかりではない。それは楽曲を自らが生み出した楽曲ではなくとも、その楽曲に触れ、聴き込み、自らの頭の中で鳴らすことができるようになり、いわばその楽曲を「私の音楽」として所有することを望む欲望を満たすことであり、その先には自分なりに歌う、演奏することが待ち構えている。素晴らしい楽曲を、自作のオリジナル楽曲として生み出すことは、誰にでもできることではない。しかし、他人が作った曲であっても、自分の思いを乗せ、自分の一部に所有すること、そして自ら奏でることは、訓練を通して達成可能である。アマチュアの音楽愛好が既存の曲を学ぶ＝まねぶ＝真似るところからスタートするのは、ごく当然である。そして、本家に少しでも近づきたい、本家の感覚を追体験したいという思いが「ナリキリ」を駆り立て、その完成度を高めていく。

東京など「中央」の側にいる人々にとっては、少なくとも本家が現役であれば、ライブに接する機会へのアクセスも比較的容易であろう。しかし、八戸のような遠方で、なかなか本家の来演もない場所にいる人々は、メディアに依存せざるを得ない。そして、その先で、自ら歌いたい、奏でたいという思いに駆られ、高い水準でそれを達成する地元の音楽家が登場すると、メディアよりもライブを尊ぶという価値観が発動されて、「ナリキリ」を支持する聴衆が成立するのではないだろうか。

以上のようなスケッチは、少なくとも現段階では、極めて粗い、脇の甘い仮説に過ぎない。しかし、このような見立てからは、例えば、正統性（オーセンティシティ）や、スタンダード曲、作家性といったキーワードに連なる様々な問題や、音楽文化の消費における「中心と周縁」の関係性の問題（例えば、日本の文脈における洋楽の聴取経験をめぐる諸問題など）への展望が開けていくようにも思う。

注

以下で言及するウェブサイトは、特記のない限り、いずれも2025年10月22日に最終確認した。

- 1) もちろん、単なる個人的印象であり、客観的な論拠とするには不十分であるが、筆者がこのように考えるひとつの理由には、筆者が馴染み深い中核市である長野県松本市との対比がある。松本市は、人口23万人、圏域人口44万人、商圏人口61万人と、八戸市とよく似た水準にある。また、「岳都、楽都、学都」の「三ガク都」をスローガンとし、音楽を前面に押し出した都市イメージの創出にも取り組んでいるが、これは、スズキ・メソッド発祥の地としての歴史や、

セイジ・オザワ松本フェスティバル（旧 サイトウ・キネン・フェスティバル松本）を軸とする取り組みを反映した、クラシック音楽に重点を置いたものである。ポピュラー音楽に関する施設に注目すると、松本市内には、ライブハウスやジャズ喫茶など、地域内の音楽家、愛好家にとっての「場」となる施設もひと通りある。さらに、松本市では、2009年以來開催されているりんご音楽祭や、その起点となり、現在は閉店した瓦レコード（2004年-2024年）の取り組みなど、注目に値する音楽関連活動が展開されてきた。しかし、八戸市で経験された地元のライブハウスなどにおけるアマチュア音楽家たちによる演奏活動の印象は、質・量ともに、松本市を上回っているように思われた。

- 2) 「ライブ部」サイトにおける「八戸市」の検索結果。（ただし、このサイトは、その後閉鎖された。） <https://www.livebu.com/search?p=1&k=%E5%85%AB%E6%88%B8%E5%B8%82>

なお、このリストは、同一の施設内に複数規模の個別の会場が設定され得る場合（フラット八戸、SG GROUP ホールはちのへ、八戸ポータルミュージアムはっち、など）や、同じ施設を利用方法によって別扱いとしている例（SG GROUP ホールはちのへ の大ホールと中ホールの違いは、2階席の使用の有無）などを重複して数えていたり、収容人数に（おそらく着席とスタンディングの違いを意識してか）「人」表記のものと「席」表記のものが混在していたり、小規模な会場などの収容人数を「不明」としていたりといった、考慮すべき点もいろいろある。

- 3) YS アリーナでは、2019年8月24日に「YS アリーナ八戸竣工記念音楽フェス WORLD HAPPINESS 2019 WITH HACHINOHE」が開催され、Cornelius、ゴスペラーズ、きゅりーばみゅばみゅ、DJ TOWA TEI、横原敬之、高橋幸宏が出演し、公称では1万人が参加したとされている。しかし、その後、これに準じた規模のコンサートはおこなわれていない。

YS アリーナ八戸・イベント開催実績（コンサート、ライブ等）（八戸市） https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/naganeokunaishatejo/bunka_sports/2/17583.html

【イベントレポート】1万人が集結！「YS アリーナ八戸」にて『WORLD HAPPINESS 2019 with HACHINOHE』開催！（PR TIMES） <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000005.00043691.html>

フラット八戸は、コンサート会場としての利用も想定されているが、基本的にはアイススケートリンクや、それを転用して設定するバスケットボール会場としての利用がメインであり、アジアリーグアイスホッケーの東北フリーブレイズや、バスケットボール B2 リーグ東地区の東北ワッツのホームゲームなどがおこなわれている。他方で、施設の一部を利用した小規模な音楽イベントはおこなわれても、大規模なコンサートの会場となることはほとんどない。公式サイトでも、「アイスリンク利用時 3,500人規模収容、バスケットボール利用時 5,000人規模収容」という記載はあるが、コンサート会場としての使用についての言及はない。 <https://flathachinohe.com/>

- 4) 南郷村では、1990年10月12日に「第1回 オータムジャズフェスティバル in 南郷'90」が南郷村立村民総合体育館（後の八戸市南郷体育館）で開催され、翌1991年からは7月下旬の土曜日にカッコの森エコーランドの屋外ステージを会場に「南郷サマージャズフェスティバル」が開催されることが定例化し、前日の金曜日の夜には「前夜祭」がおこなわれるようになっていく。また、当日の開場前、お昼頃の時間帯には、隣接する「ジャズの館 南郷」において、「カッコの森 JAZZ」と称する関連イベントが開催されるようになっている。

- 5) 本来、公会堂と公民館は、制度上の地位づけが異なるが、八戸市では長らく公会堂と、公民館

ホールを一体的に運用する取り組みをしており、1975年に竣工した現在の建物は、八戸市公会堂と八戸公民館ホールが、吹抜となっているロビーを挟んで連結された構造となっている。また、管理者も、かつての財団法人八戸市公会堂、現在の株式会社アート&コミュニティも公会堂と公民館ホールの管理を一体化して扱っており、事務室の統合されている。2024年10月から、ネーミングライツ制度の導入によって東北医療福祉事業協同組合が命名権を獲得し、施設全体の名称が「SG GROUP ホールはちのへ」となって以降も、公会堂が「大／中ホール」、公民館ホールが「小ホール」という扱いに変わりはない。

- 6) オーケストラアンサンブル金沢のコンダクターを経て、2025年4月にパーマネント・コンダクターとなった松井慶太 (b.1984) は、八戸市出身で、地元の中高生で編成される八戸ジュニア・オーケストラの音楽監督も務めている。
- 7) 八食サマーフリーライブは、2001年に八食センターの関係事業所が主催した「八食4社大祭」が開かれた際に、野外ライブが開催されたのを契機として、以降毎年8月に開催されるようになり、2020年から2022年まではコロナ禍の中で開催されなかったものの、2023年から再開されている。2013年までは、8月上旬の八戸三社大祭と重なる時期に開催されていたが、諸々の問題があり、2014年以降は8月下旬に開催時期が移された。
- 8) 南郷サマージャズフェスティバルは、当時の南郷村が主導し、1990年秋に南郷村立村民総合体育館（後の八戸市南郷体育館）で「第1回 オータムジャズフェスティバル in 南郷'90」として始まった。このときは、早慶の大学ジャズ・オーケストラも参加していたが、翌年の第2回以降、7月の開催となり、出演者のもっぱらプロフェッショナルだけが参加する形でプログラムが組まれるようになった。そうした中で2004年の第15回から市民ミュージシャンの演奏がプログラムの一部に組み込まれるようになった。2009年の第20回には八戸市立中沢中学校ジャズバンド部がオープニングに出演し、2011年の第22回には、中沢中学校とともに、市民オーケストラであるスウィングベリージャズオーケストラがオープニングに参加し、以降、ほとんどの年において、両者がオープニングに参加するようになって現在に至っている。
- 9) 八戸ポータルミュージアムはっちが発行している広報パンフレット『はちみつ』vol. 40 (2022.10.) は、「観にいこう、使ってみよう パフォーマンス劇場」と題された見開きの特集ページ (pp.4-5) で、八戸市公会堂、八戸市公民館（八戸市公会堂文化ホール）、八戸市南郷文化ホールと並べて、ROXX, POWER STATION A7, FOR ME, デーリー東北ホール、また、もっぱら演劇系のパフォーマンスに用いられているスペースベンを紹介している。 <https://hacchi.jp/hachimitsu/docs/hachimitsu040.pdf>
- 10) 表2には、YukikoがFacebookで出演を告知しているケースだけを挙げているが、このほかにも、結婚式、パーティーなどの私的イベントの余興や、高齢者施設などへの慰問など、公開されていない私的な場所でのパフォーマンスや、きわめて小規模な施設におけるパフォーマンスなどを含めると、年間の回数は40回から50回に及ぶという。また、出演者としてではなく、公演の企画、組織者としての裏方の仕事で関わっている例もいくつかあり、9月6日の「八戸南郷合併20周年 絶品グルメ祭」や、10月18日～19日の田子町のイベント「第15回タブコブマルシェ」には、出演はしなかったものの裏方として深く関わっていた。
- 11) 八戸市のホテルで、ディナーショーを定期的に行っている例としては、表1にも見える八戸プラザホテル（柏崎）のほか、八戸パークホテル（吹上）、八戸グランドホテル（番町）などが挙げられる。番町は中心市街地の内であり、柏崎、吹上はその隣接地である。

- 12) デイヴィッド・マシューズ (David Matthews, b.1942) は、編曲家、ピアニストとして、また日本ではマンハッタン・ジャズ・クインテットのリーダーとして知られ、編曲家としてグラミー賞を獲得したこともある著名なジャズ・ミュージシャンである。早くから親日家として知られていたが、2005年にマンハッタン・ジャズ・クインテットのコンサートで八戸市を訪れたのを機に、八戸と縁ができ、その後、八戸出身の日本人女性と結婚して、2021年からは八戸に定住し、しばしば地元で演奏する機会をもっている。そのなかには本稿で言及しているきわめて小規模な会場の例である「るぼぞん」や、鍛冶町のジャズ・バー「ジュニア」でも、定期的にライブをおこなっている。こうした経緯については、下記のページを参照。
八戸市民がデビッドマシューズを「マーちゃん」と呼ぶ理由 ラジオ番組「ON AIR GIG」の再開に思う <https://conanbu.com/archives/1494>
- 13) 「るぼぞん」のイベントカレンダーは、過去のものも含め、ブログで公開されている。
るぼぞんブログ るぼぞんカレンダー <https://ameblo.jp/kissa-reposant/theme-10116104353.html>
- 14) 「パトリ」の公式サイトは、2025年10月現在でもまだ残っており、閉店したことを告げる内容はない。 <https://patrie-hachinohe.com/>
しかし、インスタグラムでは、閉店が報告されており、その後拠点を東京に移してDJイベントが組織されていることがわかる。 https://www.instagram.com/patrie_hachinohe/
- 15) 聞き取りの中では、人気のない場所に車を停めて、車中で録音する、などという例外的な回答もあった。
- 16) 例えば、注9で言及した『はちみつ』vol.40の記事では、ページ下の欄外に「はっちパフォーマーバンク」の紹介と「こんなところで練習しています」という見出しとともに、はっち内の練習スタジオやレジデンス施設を紹介し、さらに、グルーヴィン楽器と、八戸市周辺の主要イベントでPAなどを用意することが多いサウンドクリエイト、その他2件の市内の貸しスタジオの情報を挙げている。
はっちパフォーマーバンクについては、下記を参照。
はっちでライブ活動ははじめませんか？ はっちパフォーマーバンク登録受付開始&PRライブ開催しました♪ (2022.08.07) <https://hacchi.jp/blog/2022/08/e002901.html>
- 17) 「八戸ポータルミュージアム はっち」は、委託管理されておらず、八戸市役所の商工労働まちづくり部が直接運営にあたっている。関連する情報は、八戸市役所のサイト内の下記のページから先に置かれた様々なページにある。 https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikaragasu/hachinoheportalmuseum_hatchi/index.html
- 18) カワムラレコードは、文明堂の店員が独立して開いた店であった。カワムラレコードとオキノの写真は、下記のページにある。
エロス世界遺産。#004 震災前の八戸 <https://note.com/hibikitokiwa/n/nb198c66f7520>
- 19) 有限会社マツモトのサイトを参照。 <https://r.goope.jp/u-matsumoto/>
- 20) グルーヴィン楽器 <https://www.groovin.jp/>
- 21) 「サウンドクリエイト」の代表者である太田修平は、地元の情報サイトのインタビューに対して、創業時以来の経営姿勢について詳細に語っている。その中では、「オールドギターセラーとしての店を持ちたいと志しました。」「なんとかリペアとコンディション調整をして、再び状態のいい良質なギターとして店頭に並ぶことで、また50~60年後の次世代に良質なギターを残

すことができる。それが自分の使命であると考えました。」など、ギターの修理、調整への情熱を語っている。また、電子楽器やPA 類についても同様の考えを語っている。

音魂馳進 ～たどり着いた温故知新～ 2019/09/19 <https://hachinohe.seeho.net/shop/%E9%9F%B3%E9%AD%82%E9%A6%B3%E9%80%B2%E3%80%80%E3%BD%9E%E3%81%9F%E3%81%A9%E3%82%8A%E7%9D%80%E3%81%84%E3%81%9F%E6%B8%A9%E6%95%85%E7%9F%A5%E6%96%B0%E3%BD%9E/>

- 22) 例えば、アマチュアからプロまで、芸能者の無段階的スペクトルが存在する沖縄の環境では、一方でコミュニティ放送の側が、(他の地域では必ずしも一般的ではない) 時間枠の販売という営業モデルに注力していることもあり、セミプロなりアマチュアでも、コミュニティ放送で自身のラジオ番組をもっている人々が一定の厚みをもって存在し、自身の音源を電波に乗せて広める可能性が開かれていた(山田, 2015, pp.199-200)。
- 23) 八戸テレビ放送が、「がくや姫」の活動を取り上げた自主制作番組『八戸のオヤジバンド頑張る!』を2004年に放映したことは確かであるが、現在、この番組の内容を残したビデオ等は確認されておらず、既に失われたものと思われる。
- 24) 2025年9月21日に開催された「HACHINOHE ナリキリ音楽祭」の様子は、八戸テレビ放送では、10月1日から3日にかけて、3夜に分けて録画放送された。また、BeFMは、全体を2時間にダイジェストした番組を10月11日に放送し、さらに14日にもそれを再放送した。
- 25) 例えば、現在のBeFMの奥瀬暁社長は、初の社員出身で40代の若い社長であるが、ベーシストとして、地元のアマチュア・バンドに参加している。このようにコミュニティ放送局の関係者が、一定以上の経験を積んだアマチュア・ミュージシャンである例は、各地のコミュニティ放送局への聞き取りでもしばしば出会うことがある。例えば、山田(2025b, p.107, 注9)で言及した、五所川原エフエム(青森県五所川原市)の業務部部長である須郷寛世は、やはりベーシストとしてバンド活動を長く続けている。また、新庄コミュニティ放送(山形県新庄市)は、「山才」という新庄弁ラップのユニット(放送局スタッフによるユニットであるが、個人名は伏せられている)のCDを自前の自主制作レーベルから、『音まだぎ』(2022年)、『まだ音まだぎ』(2025年)と、2枚出している。新庄コミュニティ放送については、山田(2024, pp.18-20)も参照されたい(ただし、そこではCDには言及していない)。
- 26) 合同会社LBBが運営するサイト「GraphToChart」には、「グラフで見る八戸市の飲食店数」と題されたページがあり、様々な観点から、八戸市の飲食店数が同程度の規模の他都市に比べて多いことを述べている。ただし、その分析方法には妥当とはいえない部分も含まれており、注意が必要である。 <https://graphtochart.com/japan/hachinohe-shi-no-of-eating-and-drinking-places.php>
- 27) 特定第三種漁港については、公益社団法人全国魚港漁場協会のサイト内のページ「特定第三種漁港とは」を参照のこと。 <https://gyokou.or.jp/toku3port/>
- 28) 例えば、横浜についての次のような記述が、その例である。
YOKOHAMA JAZZ PROMNADE 第二章 敗戦と戦後日本のジャズ復興 <https://jazzpro.jp/yokohama-jazz100/jazz100/jazz100-02>
また、沖縄についても次のような記述が、例として挙げられる。
【沖縄ジャズの歴史】アメリカ世にみるジャズと沖縄伝統音楽との融合『ウチナー・ビート』カルチャー的文脈 <https://note.com/nagareruuiota/n/n930dd5b26b23>

- 29) 例えば、もっぱらギタリストとして活動している、前出の古川明彦も、音楽演奏経験の出発点となり、読譜力を養ったのは、中学校における吹奏楽のホルン奏者としての経験であった（山田，2025a, p. 2）。
- 30) 「津軽と南部」の気質の違いについては、多数の書籍を含め、様々な形で議論があるが、ネット上で見受けられる代表例を挙げると、「おおむね津軽の気風は、おしゃべりで社交的、情熱的だが人付き合いは表面的で外面を気にすることが多く、南部の気風は寡黙で控えめ、内向的で人見知りが多いが、一度気を許せば心底信じあうとされる。…共通点は頑固で正直、強者になびかないところか。…津軽の人は意味なく騒ぎ、大げさで、親身なのは外見だけという感覚を持っているように感じる。対して津軽人から見た南部人は、感情を表に出さないため何を考えているか分からず、付き合いにくいという印象が強いようだ。」などと説明されている。
- 鱗十文庫の note #2 南部と津軽（上） https://note.com/uruku10_bunko/n/n95a9f05ab366
- 31) 2025 年の経済地理学会北東支部 8 月例会において、本稿の内容の一部を踏まえた報告をおこなった際にも、八戸の事例を特別視するのは、思い込みではないのか、他の都市においても、同様の構図で市民の音楽活動が支えられるという状況が一般的に認められるのではないかと、いう趣旨のご指摘を複数頂戴した。

文 献

- 小野純一郎（1987）：現代都市文化産業にみる情報生産に関する考察～女性歌手を通して捉えたレコード音楽産業の事例～．地域研究（立正地理学会），28-2，pp. 17-32. (crd/1050291768501777152)
- 生井達也（2025）：ライブハウス店長の生活史——二〇一〇年代以降の「オルタナティブ」な場所作り——．南田勝也・編『ライブミュージックの社会学』，青弓社，pp. 122-144.
- 成瀬厚（2012）：街で音を奏でること：2005 年あたりの下北沢．地理科学，67-1，pp. 1-23. (crd/1390282679414252544)
- 増淵敏之（2005）：国内地方都市における音楽の産業化過程 - 福岡市の場合．ポピュラー音楽研究（日本ポピュラー音楽学会），9，pp. 3-21. (crd/1390001205324615040)
- 山田晴通（2015）：沖縄市におけるコミュニティ放送の沿革と現状．コミュニケーション科学（東京経済大学），41，pp. 187-206. (crd/1050282812464124800)
- 山田晴通（2024）：2020 年以降に開局した小資本コミュニティ放送局の運営実態：大館放送，新庄コミュニティ放送，ほんじょう FM の事例から．コミュニケーション科学（東京経済大学），59，pp. 15-25. (crd/1050017887577794816)
- 山田晴通（2025a）：青森県八戸市における「フォークジャンボリー」活動（2000 年～2024 年）．パラゴネ（青山学院大学），12，pp. 1-18. (crd/1390304737140745600)
- 山田晴通（2025b）：青森県弘前市のコミュニティ放送局「アップルウェーブ」の安定的経営と課題．コミュニケーション科学（東京経済大学），62，pp. 97-109. (crd/1050306199999034112)
- 渡部薫（2013）：音楽産業の地理的展開に関する考察：地方都市への分散の可能性をめぐる．熊本法学（熊本大学），129，pp. 82-46. (crd/1050001337931535616)

謝辞

本稿は、筆者が2024年度に取り組んだ、青森県八戸市におけるアマチュアからセミプロと位置付けられる市民音楽家たちによる、ポピュラー音楽に関する活動に注目した文献調査、聞き取り調査の成果を踏まえている。本稿の執筆に際しては、本稿および別稿（山田，2025a）において言及している方々に多くをご教示いただいた。また、明示的にお名前を上げていない方々を含め、調査にご協力いただいた八戸市の数多くのミュージシャンの方々、店舗等の経営にあたられている方々はじめ、筆者の活動にご支援をいただいたすべての皆様に感謝を申し上げる。なお、文中敬称略としていることを、お断りしておく。

本稿は、筆者が代表となっている科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「日本フォークソング史再考：「名もなき人々」による文化実践を手がかりとして」（JSPS 科研費 JP23K00200）の成果の一部である。

また、本研究には、2024年度・2025年度の東京経済大学個人研究費の一部も用いた。

本稿の内容の一部は、2025年8月29日に北海学園大学で開催された経済地理学会北東支部8月例会において「八戸市における市民のポピュラー音楽演奏活動を支える社会基盤」と題して、また、11月13日に京都テルサで開催された The 17th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography（第17回日韓中地理学会議）において「The Social Infrastructure Supporting Citizens' Popular Music Performance in Hachinohe City, Aomori Prefecture, Japan」と題して報告した。